教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 11
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成26年(2014)12月22日

目 次

- シリーズ「大学授業最前線―教員の努力！学生のまなざし！(11) ―」…… 2p
  「経済学部におけるグループワークを中心とした基礎演習Aの実践について」
  根岸毅宏（経済学部教授）
  担当教員からのコメント…… 5p
  受講学生の声 …… 5p
- OBと語ろう！ スチューデント・アシスタント同窓会 …… 7p
- ボランティアステーション始動…… 11p
- 『教員力ステップアップ講座』発行しました!! …… 12p
- 名著探訪――高等教育、この１冊(第３回)…… 14p
- 教育開発推進機構彙報（平成26年８月１日～12月31日） …… 15p
- 新任教員紹介…… 16p
- SA（スチューデント・アシスタント）・ノートテイカー募集…… 16p
- 啐啄同時（そったくどうじ） ―編集後記―…… 16p

國學院大學教育開発推進機構

シリーズ

大学授業最前線

― 教員の努力！ 学生のまなざし！(11) ―

学生が主体的・能動的に学修を進めて行く「アクティブ・ラーニング」の授業形式は、近年、高等教育の分野でその必要生・有効性が大いに注目されていますが、本学においても、こうした授業形式を導入することでどのように学生の力を引き出して行くことができるか、その可能性への関心が高まっています。今回は特集として、経済学部「基礎演習A・B」において行われているグループワークを中心としたPBL授業の取り組みについて、担当の先生方から紹介していただき、併せて学生からのコメントを掲載しました。「動き」と「気づき」の広がる授業風景を御覧下さい。

経済学部におけるグループワークを中心とした基礎演習Ａの実践について

教員の授業努力

根岸　毅宏
（経済学部教授）

「基礎演習Ａ」は、１年前期に履修する必修科目であり、経済学部の重要な導入科目である。その授業内容は、①大学で学ぶための準備、初年次研修（大学で学ぶ意識の醸成、國學院大學についての理解、履修の仕方や進路選択を含む大学生活のガイダンス）、②学ぶための基本的スキルの修得（プレゼンテーション・レジュメ作成、ディスカッション、レポート作成、情報リテラシー、日本語表現）、③専門教育への導入・問題意識の養成（文献講読、プレゼンテーション、レジュメ作成、ディスカッション）などであった。この「基礎演習Ａ」において、平成26年度前期から同一の授業内容でグループワークを中心と

表紙の写真：神道文化学部主催「観月祭」五常楽を舞う学生たち

する授業の形式を、23クラス中７クラスで試験的に取り入れた。このレポートは、７クラスの「基礎演習Ａ」の取り組みを紹介するものである。

１．導入のきっかけ

８クラスの構成は、経済学部教務委員会が中心となり、「基礎演習A」の担当教員が任意で加わったものである。初めに言い出したのは根岸である。その直接的なきっかけは、本学教育開発推進機構の中山郁准教授と、立教大学経営学部のＢＬＰプログラム（日向野幹也教授、主幹）のヒアリングに行き、グループワーク形式で取り組むＰＢＬ（課題解決型授業）の成果として次の３つを聞いたことである。第１に、前期の間、グループワークに取り組むことで、学生が自ら主体的に学ぶことの必要性を理解することである。第２に、同時に、学生が自らの学びの不十分さを理解することで、その後の授業に主体的に取り組むようになることである。第３に、こうした授業を通して学生が“言いたいことを言い合える”ほどに親密になることであり、その結果、不登校者や退学者がほとんどいなくなるだけでなく、自らの学部を好きになることである。

根岸の個人的経験に照らして言えば、これまで「基礎演習Ａ」で学生が大学のことを好きになるなど意識したこともなかった。そこで、本学部でもグループワーク形式の授業を取り入れ、教員が学生に教えるのではなく、学生同士が考え、授業後の振返りシートの記入を通して、自らの知識・経験の不足を理解させる授業の実践に踏み切った。

▲最優秀グループには惜しみない拍手が

▲クラスの最優秀グループを投票で選出します

２．授業の形式

「基礎演習Ａ」では、大きく３つのことに取り組んだ。第１に、授業が７回か、８回を経過するまでアイスブレイクを行い、グループワークを行って意見交換できる親密さを学生の間に作ることである。第２に、学修スキルの修得であり、第３に、課題への取り組みである。

学修スキルの修得は、ノートの取り方、レジメの作り方、レポートの書き方を学んだ。いずれも、教員が教えるのではく、学生同士で考えさせた。例えば、ノートの取り方は10分程度のドキュメンタリーを見せてノートを取らせ、その後に学生同士でどういったノートがわかりやすく、見やすいのか、グループワークで議論させた。

課題への取り組みでは、「10年後の渋谷は成長するのか、衰退するか」をテーマに、授業４回分の討論を行い、授業２回を使い発表を行った。

３．授業の成果

「基礎演習Ａ」では、23クラスに再履修１クラスを加え、24クラスでアンケートを行った。この結果は、『國學院大學 教育開発推進機構紀要』（第６号）に掲載するので、ここでは、その一部を掲載しよう。

アンケートの問５で、「次の能力の中で、授業内容と関係すると感じたものをすべて選択してください（複数選択可）」と質問し、いわゆる「社会人基礎力」について問い、該当するものの“○”を塗りつぶしてもらった。すなわち、主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、

▲各グループがそれぞれ工夫を凝らしてプレゼンを行います

規律性、ストレスコントロール力である。学生にはこれらが社会人基礎力に該当することを教えておらず、また教員もこれらを意識した授業を実施していない。

【表１】では、学科とグループワークを実践した７クラスを「チーム」として、その他を「一般」として表記している。それぞれの項目を塗りつぶしたパーセンテージを見ると、学科別には経済ネットワーキング学科で高く、クラス別ではチームで高いことがわかる。同じく、能力要素の数の平均値を算出した結果にも注目すると、学科別では経済ネットワーキング学科で高く、クラス別ではチームで高い。

以上のような取り組みを、１年後期の義務履修科目「基礎演習B」でも継続して実施している。「基礎演習B」は、①大学で学ぶための準備、初年次研修、②学ぶための基本的スキルの修得、③専門教育への導入・問題意識の養成といった授業内容の中で、より③を重視したものである。平成26年度後期には、クラス数が７クラスから13クラスに増え、授業内容もより課題解決型に近づけて、日本フランチャイズ・チェーン協会から「10年後のコンビニ」という課題を提供してもらい、取り組んでいる。12月10日（水）５時限目と６時限目には、13クラスの代表グループが、13クラスの１位を決めるプレゼンテー

表１　社会人基礎力への評価

単位：％

		主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	コントロール力	能力要素得点
全体		52.3	29.7	45.8	40.4	40.6	19.4	53.5	44.1	32.3	28.4	23.2	9.9	4.2
学科														
	経済	48.9	25.5	44.1	38.8	42.6	20.7	50.5	46.8	28.7	28.2	23.4	14.9	4.1
	経済ネットワーキング	65.6	39.7	51.1	53.4	49.6	24.4	71.0	53.4	43.5	34.4	26.7	6.9	5.2
	経営	57.0	33.3	54.4	38.6	38.6	16.7	53.5	41.2	34.2	29.8	25.4	7.9	4.3
	不明			1.9	1.9									0.0
クラス														
	チーム	64.6	42.9	53.4	49.1	41.6	28.0	61.5	50.9	42.9	37.9	24.8	8.1	5.1
	一般	42.6	21.2	39.0	33.4	37.4	13.8	46.0	37.7	24.8	21.8	20.9	10.1	3.5

▲各自が役割を担って、チームワークを発揮します

ション大会も実施する。これらの取り組み実践も、『教育開発ニュース』や『國學院大學 教育開発推進機構紀要』で報告していきたい。

担当教員からのコメント

細井　長
（経済学部准教授）

グループワーク型基礎演習を実施してみて、以下の２点の感想が浮かびます。

まず、グループワーク型基礎演習は、学生自らが意見を出し合いながら進めていく場であり、学生の知識量やその質によって討論の方向性が左右されます。とはいえ、知識を付けるための授業ではなく、自らの知識が不足していることを知り、他の講義型授業で知識を身につけるインセンティブにしていかねばならず、その方向性を教員が誤解すると、全く性格が異なったものになってしまうでしょう。

二つ目に20数名のクラスの中には、クラスに溶け込めず、グループ討論に参加できない（したくない）学生が存在します。こうした学生をどのように扱うのか、その対処方法は難しい。このスタイルを全く拒否しているのであれば何も対応はできないでしょうし、内気で溶け込めないというのであれば、他の学生達がフォローすべきなのでしょうが、今年度はその様子もあまり見られず、教員側からも基本的に放っておきました。さらに言えば、学力不足によって討論に参加できない学生もおり、入学してくる学生が多様化している中、クラス編成のあり方も気になる点ではあります。

担当教員からのコメント

宮下　雄治
（経済学部准教授）

本年度後期の基礎演習では、グループワークを主体とした演習形式の授業において、大学の外部組織からの課題に取り組むという、新しい試みを行いました。与えられた課題に対して、情報収集から整理・分析・討論・発表という一連の活動を行う中で、学生一人ひとりが自らの行動やチームへの貢献を「振り返る」ことを重視しました。こうした自分を客観視する機会を毎回の授業で設けることにより、自分に不足している能力やスキルに気付き、それを補うためにはどのような学習や取組みが必要であるか、ということを自分で考える機会を与えられる点に大きな意義を感じています。入学年度でのこうした経験は、今後の学習に対する意識や行動に大きな影響を与えるものと考え、本取組みが大学教育の一つの課題である「主体的な学習」の動機付けとしても十分に機能するという手応えを感じています。

受講学生の声

篠礼夏（経営学科１年）

前期の基礎演習Aは少人数制の授業でした。良かった点は、第１に、クラスメイトとの仲を深められたことです。主な活動がGWのため、常にクラスメイトとコミュニケーションを取り、前期が終わる頃にはよ

▲受講者全員が「評価シート」でプレゼンの評価を行います

く話ができる仲になっていました。第２に、少人数制のため､学生一人ひとりが先生と連携を取ることができて、とてもやりやすく、安心感もありました。第３に、自分から行動しようという意識や協調性も身に付いたと思います。悪かった点は、GWだからこそ他人に頼り、自分がやらなくても誰かがやるだろうと考えてしまうこともありました。基礎演習Aを通して私が学んだことは、将来を見つめるいいきっかけになりました。

受講生（経済ネットワーキング学科１年）

基礎演習Aでは、プレゼンテーションにおいて重要なレジメの作成方法を学ぶことができました。複数の資料や文献を収集し、調べるテーマに必要な情報を抽出して資料としてまとめるという作業は、最初少し難しく感じられました。しかし、講義の中ではお手本のレジメや基本の参考文献が示され、また興味のあるテーマを複数の中から選択することができたので、スムーズに学びを深めていけました。また、グループメンバーからの質問やアドバイスを受けて、レジメを更に解りやすく直したり、参考資料を増やしたりすることを繰り返しましたが、この過程で自分の発表の足りない部分や改善点を客観的に認識することができました。

宗澤真衣（経営学科１年）

結果を先に述べると、グループワークに対する取り組み方やコミュニケーションをとることの大切さを学ぶことができ非常に有意義な授業となった。レジュメの作り方、発表の仕方を言葉で説明するだけでなく、ゼミの先輩が実際に目の前で説明してくれたことも印象に残っている。私達学生が教えを請うだけの受け身の姿勢ではなく、自主的に考え、行動しグループでのディスカッションへと繋げることができ、積極性も生まれた。

長尾沙津季（(経済ネットワーキング学科１年）

基礎演習Aの授業ではレポートやレジュメの書き方など大学の他の授業にも活かせることだけでなく、グループワークでの積極性・自分の意見をいかに上手く相手に伝えるかなど、社会に出てからも使えることを多く学ぶことができたと感じた。この少人数授業を通じてクラスのメンバーとは非常に仲が深まったし、さらにそのことによってグループワークがますます円滑で活発化していき、プラスのサイクルを生み出していったと思う。

▲これらの授業実践を踏まえて、12月10日には日本フランチャイズチェーン協会の協力を得て「基礎演習B」プレゼンテーション大会が開催され、各グループがコンペ形式でしのぎを削りました

OBと語ろう！ スチューデント・アシスタント同窓会

平成26年10月18日（土）
ホームカミングデー・ＳＡ同窓会レポート
（於、國學院大學渋谷キャンパス）

SAとは、スチューデント・アシスタントの略称で、大人数授業での授業補助を通じて、授業の円滑な運営をサポートし、教育効果の向上を目指す学生団体です。「教材の印刷や配布」「出席カード・コメントペーパー等の配布・回収・整理」「授業アンケートの配布・回収」「マイクやプロジェクター等のAV機器設定・片付け」を基本業務とし、平成26年度後期は27名が活動しています。

今回、ホームカミングデーの中で開催した「SA同窓会」は、「SAで築いた人間関係を在学中の一時的なものではなく、長く付き合える関係へと深化させること」や、「在学生が企画・運営をすることで世代を超えた交流の場を創出し、双方に良い刺激となること」を目的として企画しました。

同窓会には、現役SAが15名、卒業された元SAが9名、SAを運営する教育開発推進機構の教職員が3名の総勢27名が参加しました。第1部の「SA座談会」では、元SAにSA業務の話やSAで得た経験をお話いただき、SAのあり方について活発な意見交換がなされました。第2部の「SA同窓会」では、飲み物や軽食を片手に現役SAと元SAの交流があり、最後には現役SAによるビンゴゲームが行われ、会場は大いに盛り上がりました。　（編集担当：清野賢太）

▲現役のSAたちから様々な質問が……

【座談会参加者】

●現役SA

佐藤　祐衣（文学部日本文学科・4年）
清野　賢太（法学部法律学科・4年）
竹中　　秀（法学部法律学科・4年）
濱口　奈々（文学部日本文学科・4年）
吉野　匡哉（文学部哲学科・3年）

●元SAの卒業生

吉田　有希（第120期卒業生）
杉本　亮佑（第121期卒業生）
大和友大朗（第121期卒業生）
岡田　紫音（第122期卒業生）
上島　亮平（第122期卒業生）
小林　大峰（第122期卒業生）
吉岡志武貴（第122期卒業生）
中白　里美（第123期卒業生）

1 元SAと語らう！「SA座談会」

吉野：SAの経験が卒業後に役立ったことはありますか。

上島：様々な学部や学科、学年を超えて団体として行動したり、親睦を図るための企画を立てて運営することで、人間関係を構築する術を学べたことが役立っています。

吉岡：やはり人間関係の構築が一番だと思います。教職員の方や学生とコミュニケーションをとることで、人間関係を構築する術を学べました。あとは印刷や紙の裁断が上手になりましたね。

中白：飲み会用の渋谷のお店に詳しくなりました（笑）先生方や職員の方も参加されるので、プレ社会人の場ではないですけど、お酒の席でどのように振舞ったらよいのか、目上の方が参加されるときはどういうお店を手配すれば良いのか、ちょっとした社会人の世界を体験できました。

岡田：私は社会人ではないのでSAでの経験が役に立っているかは微妙なところですが、仕事の引継ぎのやり方、引き継ぐ際に仕事を洗練させていくということを経験できる場であったと思っています。(SAはシフト制なので)伝え方を工夫しなければ、次のシフトに迷惑をかけたり、仕事の効率を下げてしまうので、引継ぎや伝え方を自分たちで考えなければならなかったという環境は（学生にとって）いい経験であったと感じています。

佐藤：SAで一番印象に残っている体験・出来事は何かありますか。

吉田：私は北海道の短期大学部から編入してきたのですが、当時は大学で知り合った友人が少なかったです。ですので、SAに所属したことで様々な学年や学部の人とのコミュニティーの中に入れたことは、とても印象に残っています。あとは、教室内のマイクやPC等の機械

▲現役SAから、業務についての報告も行われました

▲時には考え込みつつ真剣に答えるOBのSAたち

操作を苦手とする先生のサポートを行っていた時に、自分がいないと「あれ？彼は来ていないのか」と先生が仰ってくださったことがとても嬉しかったです。結局、名前は覚えてもらえなかったのですけどね（笑）

岡田：印象に残っているというのとは少し違うのですが、大学がどういう組織・システムで運営されているのかを理解できたことは面白かったです。

清野：確かにSAは、大学でのアルバイトや学生団体といった側面以外にも、大学職員のインターンシップといった特色があるように思います。学生にとって、働くことを体験するよい機会でもありますね。

吉田：あとは、学生視点でないと見えてこないことが見えてきます。例えば、学生の受講態度であったり……。

竹中：そうですね。そういうところは教職員の方よりもSAの方が身近で分かるわけですから、それを教職員の方と情報を共有することが大事になりますよね。

濱口：SAに興味のある学生に向けて一言お願いします。

小林：社会に出るための勉強だけでなく、教育現場の裏が見えるという点で教職課程を取っている人にもおすすめではありますね。教職員の方が裏でどのような活動をしているのかを傍で見られますので、見ていて勉強になります。

大和：SAには２つの側面があると考えています。１つは手伝い・アルバイトの側面で、もう１つはサークル活動のような側面です。「交友関係を広げたいけど引っ込み思案だし、ノリが合うかわからない」「サークル見学行ったけど合わなかった」という人が多くいると思います。SAは、大学の授業の支援という共通の目的があって、そこに応募してきた人たちで構成されます。そのせいか、比較的ノリが合いやすい人達が集まるので、コミュニケーションに不安があるけど交友関係を深めたいなと

思っている人は、その取っ掛かりとしてSAをやってみるのもよいのではないでしょうか。手伝い・アルバイトの側面でいうと、SAの仕事はコミュニケーションを大切にしているので、それを鍛えたい人や大学の裏側を知りたい人はSAに是非応募してみてください。

杉本：私はサークルに所属していなかったので、SAに入ったことで学部を超えた人達に出会え、SAという居場所が大学に出来ることが意味合いとして大きいと思います。そして、SAをやったことで、大学の組織を、全てではないですが、ある程度学べることは社会に出ても役に立つと思うし、何かしら得て、今後に活かされると思います。

座談会に参加して、SAは、学年や学部学科を越えた学生間の交流が魅力であると改めて実感しました。また、大学の授業をサポートすることで仕事に必要なコミュニケーション能力や問題発見･解決能力を鍛えることが出来るだけではなく、大学に自分の居場所を作れる組織であることも再認識しました。一時的な居場所ではなく、卒業後も関係を築くことの出来る組織にしていきたいです。（清野）

▲後列左から、中白・濱口・佐藤・岡田・吉岡・小林・上島・吉野、
前列左から、竹中・大和・吉田・杉本・清野

2 同窓会に参加してみて……

●杉本　亮佑（第121期卒業生・元SA）

教育開発推進機構の教職員の方々並びに現役SAの方々は仕事や勉強で多忙な中このような素晴らしい会を開いて下さり、誠にありがとうございました。SA同窓会に参加して、久しぶりに機構の教職員の方々、先輩後輩や同級生にお会いできてとても有意義で楽しい会でした。会では現役SAの報告が簡潔にされていましたが、現役時と比較してますます進化・深化しているということが分かりました。月日が経てば進化するのは当然という意見がありますが、進化・深化しているのはSAの一（いち）OBとして嬉しいものです。現役SAとの対談を通じて、学部時代SAとして働いていた当時の状況、例えば授業前にプリント配布した際の様子や、配慮していたことなどを思い出し、懐かしい気持ちになりました。

●岩崎　彩佳音（文学部２年・現役SA）

SA同窓会に参加して、卒業された先輩方との交流によって、SAというものが何であるのか改めて知ることができました。

元SAの先輩からSAの来歴や業務マニュアル作成の経緯を伺い、先輩達はSAが何であるのか、その存在を主体的に築き上げてきたのだと実感しました。そして、写真係の担当として沢山の素敵な笑顔を撮ることができ、SAという組織が私達にとって大学の中で大切な居場所の一つであることに気付きました。学部の学生によるSAというのは他大学にはない取り組みということで、SAとして得られる経験も思い出も貴重なものだと思います。日々の業務にあたるなかで多くのことを学び、さらに引き継ぎ伝えていきたいです。

SAになれてよかったと感じる、とても楽しい企画でした。ありがとうございました。

3 元SAに聞く！　SAを務めての感想

●大和　友大朗（第121期卒業生・元SA）

私は、平成22年度前期のトライアルⅡ期からSAを始め、卒業する平成24年度後期まで続けました。

SAとは、先生方の授業効率を少しでも上げるための、縁の下の力持ちのような存在であると思います。SAの仕事は、一見すると簡単という印象を持ってしまいますが、いいかげんに仕事をこなしていては、先生に迷惑をかけるばかりか、延いては授業を受けている学生にも迷惑をかけることにもなります。そのため、簡単であるからこそ気を引き締め、ミスを少なく正確に業務を行うことが大切だと感じます。

現役SAの皆さんも業務を簡単と感じ、気が抜けてしまうこともあるかもしれませんが、先生方に対する心遣いを忘れず、ぜひ映像機器や事務仕事のプロフェッショナルになるくらいの気持ちを持って業務に励んでください。

また、業務の効率を上げるためにはSA同士の協力が欠かせません。協力にはお互いのコミュニケーションが重要です。良かったことだけでなく、ミスやトラブルなどの悪いことも共有して次の業務につなげることが大事だと思います。SAは業務上のパートナーとしてだけではなく、私生活でも良き友人となってくれますので、現役SAの皆さんもコミュニケーションをぜひ綿密にとってお仕事をしてください。

●吉岡　志武貴（第122期卒業生・元SA）

SAを経験してみて、他学年の方々との関わり方や教職員方との関わりの中で、人間関係の構築の仕方について、学べたことが大きな経験の一つと言えます。また、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」の重要性を学べたことも大きいです。

人間関係の構築は、大学という決して小さくないコミュニティの中で、普通に学生生活を送っていると得られない経験であり、自分自身の成長を促進させてくれたのがこのSAでの活動だったと思います。

「ほうれんそう」の重要性については、在学中に学べたことは特に貴重であったと思います。社会に出て強く思うことです。あっ……社会に出てと言えば、印刷機の使い方を知ることができたのも大きいです。今の職場で、この経験も重きを成してくれています。

他方、このようなニュースレターへの寄稿の貴重な機会をくださったり、様々な会を催してくれる後輩に出会えたこと、SAの歴史を築いてくださった諸先輩方とも交流ができる。と言うものは、SAに入らなければ得られなかったものであり、とても感謝しています。

教職員方や先輩方、後輩たちと共に大学生活を充実したものにできたのは、とても大切な思い出の1ページです。これからも、様々な面で関与していければと思っています。社会に出てしまうと、思った以上に自由な時間は制限されてしまいます。今のうちにできることを後輩の皆さんは、たくさん経験していってください。実際に経験してみないとわからないのが人間なのですが……（笑）

「後悔先に立たず」大学生活は、あっ！という間です。SAを通して楽しい思い出をたくさん作っていってください。後輩の皆さん、SAの活動をこれからも盛り立てていってください。僕自身はお呼びいただければ、時間の許す限り参上させていただきますヨ！

今回、先輩方と交流することで、今後のSAについて考えるよい機会となりました。また、SA同窓会を企画・運営をして、現役SAの団結力をさらに強めることができました。来年度以降も継続的に交流が行えるように引き継ぎ、来年は元SAとして「SA同窓会」に参加したいと思います。
企画・運営を手伝ってくれた多くのSAと参加してくださった元SAの先輩方、このような機会を設けてくださった教職員の皆様に感謝しております。（清野）

ボランティアステーション始動

平成26年10月1日、教育開発推進機構は、学修支援センター内に「ボランティアステーション」を設置しました。

本学では、これまで学生アドバイザーやエルダー・サポーター、SA（スチューデント・アシスタント）、CA（コンピューター・アシスタント）、ノートテイカー等の学内ワークスタディ、岩手県紫波町への間伐体験実習や東北再生「私大ネット36」等のスタディツアーといった、様々なボランティア活動の企画・運営を行って来ました。ボランティアステーションは、これらの活動の情報発信や支援を行います。

東北再生「私大ネット36」サマープログラム

「私大ネット36」は「被災地に学ぶ」をテーマとして、農作業体験や、海岸清掃等のボランティア活動、現地視察や被災体験者の話を聞く等のフィールドワークを行い、夜は宿舎でワークショップによる振り返りをしています。

▲地域産業を学ぶ一環として、農家の方と一緒に農業体験をしました。

▲夕食後、班ごとのグループワークで1日の振り返りをし、最終日には全体で発表会を行いました。

東北再生「私大ネット36」第2回シンポジウム

今年11月８日に開催された２回のシンポジウムでは、基調講演と活動報告、そして、写真やグループワークで使用した模造紙等を利用したポスターセッションが行われました。

▲ネット36のプログラムは4つのActにわかれています。シンポジウムでは、それぞれ引率した先生と参加した学生によって報告が行われました。

▲シンポジウム前や休憩時間を利用してポスターセッションが行われました。ポスターの前にはActに参加した学生がいて、来場者に説明をしています。

このような学内ワークスタディ・スタディツアーの情報発信を行うとともに、学外のボランティア情報についても積極的に紹介して行く予定です。

また、ボランティアステーションには、毎週月・水・金にボランティアに関する様々な情報提供やアドバイスをしてくれる「ボランティアコーディネーター」がいます。

ボランティア活動について知りたいという方、実際に参加したい活動があって、詳しい情報へのアクセスの仕方が知りたいという方にとって、強い味方になってくれるはずです。興味のある方は、是非一度訪れてみてください。

辻　陽一郎（ボランティアコーディネーター）

10月よりボランティアステーションでの業務を担当させていただくこととなりました。ボランティア活動は新しい社会との接点や、新しい人とのつながりが生まれる楽しさがあります。皆さんの学生生活がより充実したものになるようサポートができたらうれしいです。私自身はじめてボランティアをしたのが大学生のときでした。ボランティアは初めてで不安という方も、なんとなく興味があるという方も、ボラステにお気軽に立ち寄ってください。

あなたの授業を豊かにする究極の一冊

教員力ステップアップ講座

発行しました!!

教育開発推進機構では、平成17年以来発行してきた『FDハンドブック』を全面的に改訂し、あらたに『教員力ステップアップ講座～あなたの授業を豊かにする究極の一冊～』を発行しました。この本は『FDハンドブック』や既存の教授法の専門書に比べて、教員が、教室で授業を行なう場合に必要なノウハウに的を絞り、簡便に、解りやすく示しています。以下、簡単に内容を紹介してみましょう。

【教員力ステップアップ講座 目次】

第一章　本学の教育方針と制度
単位制・CAP制・３つのポリシー等の基礎知識や、シラバスの観点別教育目標記述などについて解説しています。

第二章　授業設計編
授業設計とシラバスの記述方法について、本学の様式に従って具体的な説明を行っています。

第三章　授業実践編
本学で開講されている授業の概要、講義型授業と学生主体型授業の説明、アクティブラーニングの活用法等について説明を行っています。

第四章　成績評価編
成績評価の基準原則、ルーブリック評価の方法等について具体的に解説しています。

第五章　授業の自己診断とスキルアップ編
本学で実施している「学生による授業評価アンケート」と「教員自己評価アンケート」、およびK-TeaDシステムの使い方を説明しています。

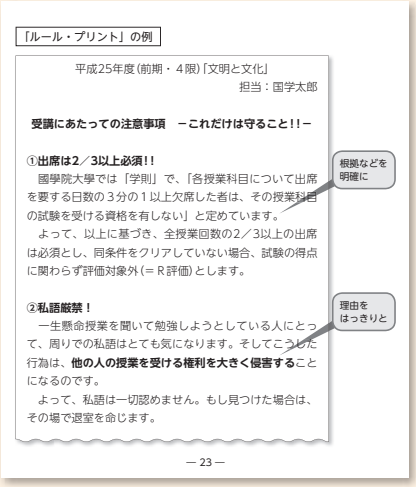
第六章　学生対応編
本学における学修支援体制の概要、障害のある学生への対応について説明しています。

★教室での授業に特化した内容！

これまで本学で発行してきたものも含め、各大学のいわゆる『FDハンドブック』は、授業方法だけではなく、教務事項や研究費、学内制度など幅広い分野をカバーしていました。しかし、これだと大学で教員が教育研究生活を送るためのマニュアルにはなるものの、扱う内容が広すぎて授業方法について記すスペースが限られてしまいます。そこで、今回の『教員力ステップアップ講座』では、内容を授業運営の方法と学生対応、すなわち、教員が教室で授業を行う上で必要な知識に的を絞り、できるだけ簡潔な記述で示すようにしました。そのため、最初から通しで読むのではなく、辞書を用いるように、必要な項目だけを見て活用していただけるようになっています。

★講義型授業のコントロール法のツボを解りやすく！

現在、各大学でアクティブラーニング（能動的学修）を取り入れた授業運営が重視され、各大学の「FDハンドブック」でも、その運営方法について盛んに取り上げられています。しかし、主に少人数科目で運営されるアクティブラーニング授業と異なり、大きな教室で多数の学生を対象に授業を行う講義型の授業も、依然、大学で大きなウエイトを占めているのも現実ですし、こうした授業こそ、運営が難しいというのも現実です。


「ルール・プリント」の例

平成25年度（前期・４限）「文明と文化」
担当：国学太郎

受講にあたっての注意事項　－これだけは守ること!!－

①出席は2／3以上必須!!
國學院大學では「学則」で、「各授業科目について出席を要する日数の３分の１以上欠席した者は、その授業科目の試験を受ける資格を有しない」と定めています。
よって、以上に基づき、全授業回数の2／3以上の出席は必須とし、同条件をクリアしていない場合、試験の得点に関わらず評価対象外（＝Ｒ評価）とします。

根拠などを明確に

②私語厳禁！
一生懸命授業を聞いて勉強しようとしている人にとって、周りでの私語はとても気になります。そしてこうした行為は、**他の人の授業を受ける権利を大きく侵害する**ことになるのです。
よって、私語は一切認めません。もし見つけた場合は、その場で退室を命じます。

理由をはっきりと

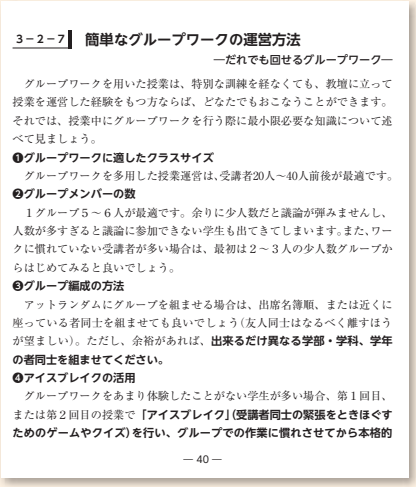
－23－

▲「授講上のルール」例（P. 23）

そこで『教員力ステップアップ講座』では、大教室（受講学生300名以上）も含む講義型授業の運営方法やクラスコントロールのコツの紹介に力を入れました。具体的には第１回目の授業の際に学生に示す「受講上のルール」や机間巡視の重要性、ワークやコメントペーパーの活用、小テストの導入など、講義型授業にアクティブラーニングの要素を取り入れる方法などが、わかりやすく紹介されています。

★すぐ活用できるアクティブラーニングの方法！

「アクティブラーニング」とは、いかなる授業方法で、学生に対してどんな効果があるの？　また、どうやってやればよいの？　そう考えている先生も多いことかと思います。『教員力ステップアップ講座』では、アクティブラーニングの基本的な概念や期待できる効果について紹介した上で、もっともベーシックなグループワークの運営方法を紹介しています。さらに巻末の付録には、グループワークを活用した場合の授業計画や１回の授業のタイムテーブル、授業終了後の振り返りシートや学生相互による評価票の作例が掲載されています。教壇に立ったことがある教員ならば、本書を用いてただちにグループワークを運営できる内容になっています。



3－2－7　簡単なグループワークの運営方法
―だれでも回せるグループワーク―

グループワークを用いた授業は、特別な訓練を経なくても、教壇に立って授業を運営した経験をもつ方ならば、どなたでもおこなうことができます。それでは、授業中にグループワークを行う際に最小限必要な知識について述べて見ましょう。

❶グループワークに適したクラスサイズ

グループワークを多用した授業運営は、受講者20人～40人前後が最適です。

❷グループメンバーの数

１グループ５～６人が最適です。余りに少人数だと議論が弾みませんし、人数が多すぎると議論に参加できない学生も出てきてしまいます。また、ワークに慣れていない受講者が多い場合は、最初は２～３人の少人数グループからはじめてみると良いでしょう。

❸グループ編成の方法

アットランダムにグループを組ませる場合は、出席名簿順、または近くに座っている者同士を組ませても良いでしょう（友人同士はなるべく離すほうが望ましい）。ただし、余裕があれば、**出来るだけ異なる学部・学科、学年の者同士を組ませてください。**

❹アイスブレイクの活用

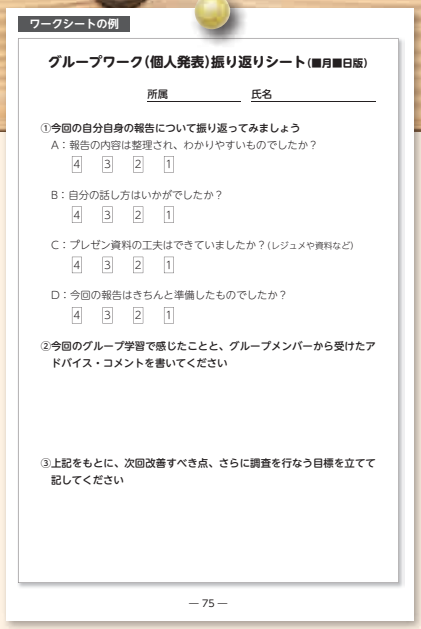
グループワークをあまり体験したことがない学生が多い場合、第１回目、または第２回目の授業で**「アイスブレイク」（受講者同士の緊張をときほぐすためのゲームやクイズ）を行い、グループでの作業に慣れさせてから本格的**

― 40 ―

▲グループワークの運営方法（P. 40）

★教室で学生と向き合うために
―成績評価・授業のスキルアップ・学生対応のいろは！

大学の教員として大事なことは、自身の授業をさらによくしてゆくことです。そうすれば学生も授業を通じてますます成長し、教員もまた、教える喜びを堪能することができます。こうした教員の教育力のさらなる成長を支援するため、本書では当機構が運営している「学生による授業評価アンケート」や、K-TeaD（國學院大學教育業績データベース）にある「教育活動における教員自己評価アンケート」の活用方法が紹介されています。また、近年はより公正、かつ、学生に説明可能な基準をもとにした成績評価が求められています。『教員力ステップアップ講座』では、成績評価の基本的な知識について説明するとともに、近年大学教員の間で関心が持たれている「ルーブリック評価」の方法について紹介しています。これに加えて、本学における学修支援体制と、多様な学生に対する対応の仕方、学内各機関との連携方法について紹介してあります。とくに、教室での学生対応の仕方と学内機関との連携についての紹介は、他大学の「FDハンドブック」にはこれまで余りなかったものです。



ワークシートの例

グループワーク（個人発表）振り返りシート（■月■日版）

所属　　氏名

①今回の自分自身の報告について振り返ってみましょう

A：報告の内容は整理され、わかりやすいものでしたか？
4　3　2　1

B：自分の話し方はいかがでしたか？
4　3　2　1

C：プレゼン資料の工夫はできていましたか？（レジュメや資料など）
4　3　2　1

D：今回の報告はきちんと準備したものでしたか？
4　3　2　1

②今回のグループ学習で感じたことと、グループメンバーから受けたアドバイス・コメントを書いてください

③上記をもとに、次回改善すべき点、さらに調査を行なう目標を立てて記してください

― 75 ―

▲グループワーク振り返りシート例（P. 75）

『教員力ステップアップ講座』は、上記のような特色をもった編集がなされていることから、これまでの『FDハンドブック』よりも、より解りやすく、使いやすい内容になっています。もちろん、この本はいわゆる「教授法」について記した著作に比べれば、初歩的な内容でしょう。しかし、本書に記されている、授業運営に関する基礎的事項をきちんと行なってゆけば、少人数科目はもちろん、大人数を対象とした講義も円滑に運営することができます。授業運営で欠かすことのできない、そして実践して頂きたい基礎中の基礎を紹介したからこそ、本書は「あなたの授業を豊かにする究極の一冊」になるわけです。

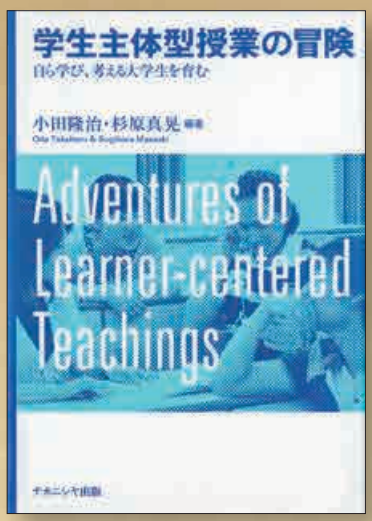
本書が本学で教える全ての先生方の授業を、さらに豊かにする一助となれば幸いです。

なお、本書は渋谷・たま各キャンパスの教員室に置いてありますので、必要な方は教員室にお声かけください。

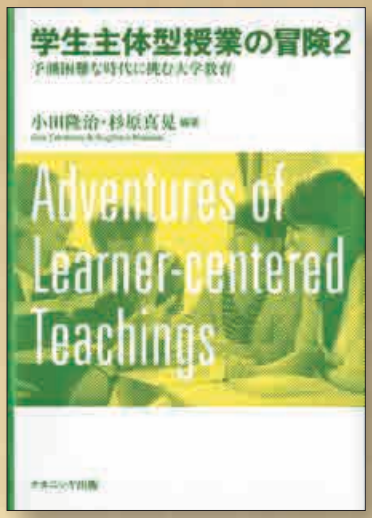
名著探訪

― 高等教育、この１冊 ―（第３回）

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた１冊を紹介するコーナーです。



小田隆治、杉原 真晃編著『学生主体型授業の冒険―自ら学び、考える大学生を育む』
2010年８月　ナカニシヤ出版



小田隆治、杉原 真晃編著『学生主体型授業の冒険2 予測困難な時代に挑む大学教育』
2012年11月　ナカニシヤ出版

近年、大学教育の世界においては「アクティブラーニング」（能動的学修）や「学生主体型授業」という言葉が飛び交い、初年次教育におけるグループ学修の導入や企業と提携したPBL授業（問題解決型授業）の導入が進められつつある。しかし、アクティブラーニング＝グループ学修、という印象も先行し、どのように運営すればよいのか、また、自身の授業になじむものなのか、さらに、果たして学生にどのような効果があるのか、など考え、二の足を踏んでいる方もあるかもしれない。そうした、この種の授業のイメージをつかみ、その授業展開の例について知ることができるのが、今回紹介する『学生主体型授業の冒険　―自ら学び、考える大学生を育む』、『学生主体型授業の冒険２　予測困難な時代に挑む大学教育』である。

この２冊のシリーズは、東日本における大学教育改善の、まさしく「台風の目」となった、山形大学の小田隆治教授と杉原真晃准教授（現、聖心女子大学教授）が編著者となり、全国の大学で展開されている多種多様な「学生主体型授業」の事例が紹介されている。小田氏によれば、この「学生主体型授業」とは、厳密に概念化されたものではなく、双方向型授業やPBL授業、グループワークなどを用いながらも、「学生が自ら問題発見をし、そのことについて自学自習し、深く行動できるようになる」という学習目標をもち、「学生の主体性」の育成を、授業の目標に掲げている授業を広く指すものであるという。この二つのシリーズには、授業を通じて学生の主体性を引き出し、質の高い学習に導く工夫に満ちた授業が紹介されている。

本書で紹介されている授業は、近年各大学で取り組まれ始めている、同一シラバスによる画一的なアクティブラーニングを取り入れた初年次教育とは異なり、教養教育、学部専門科目、キャリア教育、リメディアル教育など大学で行われているものであり、その分野も人文、社会、自然科学など多岐に渡っている。加えて、これらの授業は決して少人数科目で展開されているのではなく、大人数授業でも行われている。例えば高名な「橋本メソッド」をはじめ、京都大学や立命館大学の大人数科目における事例も紹介されている。繰り返すが、「学生主体型授業」というのは、単に少人数クラスで学生にグループワークをさせるというものではなく、講義型の、しかも大人数授業においてもトライすることができるのである。紙幅の関係上、個別の授業の紹介はすることができないが、いずれも、自分が学生であったら是非受けてみたい、そんな魅力的な授業が紹介されている。そしてなによりも、執筆者各教員による授業紹介からは、授業に取り組む学生の成長する姿はもとより、教員が生き生きと授業に取り組む姿がうかがわれ、それを我々読者も楽しむことができるのである。ゆえに、各書とも250ページ前後の厚さながら、一気呵成に読めてしまう。

そして、なにより本書を通じて知るもっとも重要なことは、こうした授業は、特別な技術・技法を用いなければできないのではなく、教壇に立つ教員なら、誰もができる工夫のもとに成り立っているということである。そう、アクティブラーニングやPBL、「学生主体型授業」は、なにも特殊な専門家が占有物ではなく、現場の教員が開発し、行ってゆくものという、当たり前ながら、なかなか気が付かないことに、改めて気づかされるのである。

筆者もこの２冊を読み、「オレにもできそうだな！」と思ったことが、自身が担当する授業に学生主体型授業の要素を取り入れるきっかけとなったものである。更に面白い授業を創出したい方、授業を通じて学生が自ら学ぶようにできればと考えている方、是非この２冊をお読みください。きっとこの本が、皆さんの背中をぽんと押してくれると思います。（中山）

教育開発推進機構彙報

（平成26年８月１日～12月31日）

※肩書きは等は当時のもの

組織

10月１日：ボランティアステーション開設
11月６日：LLC YOKOHAMA OFFICE開設

会議

○運営委員会
第３回：９月17日　第４回：11月19日
○教育開発センター委員会
第５回：10月１日　第６回：12月３日
○共通教育センター委員会
臨　時：９月17日　第５回：10月１日
第６回：10月29日　第７回：12月３日
○学修支援センター委員会
第５回：10月１日　第６回：10月29日
第７回：12月３日
○ランゲージ・ラーニング・センター委員会
第５回：10月１日　第６回：11月５日
第７回：12月３日
○機構専任教員協議会
第４回：８月７日　第５回：９月24日
第６回：10月22日　第７回：11月12日
第８回：12月17日

行事

○講演会・シンポジウム
10月25日：平成26年度FD講演会
「カリキュラムの評価と再設計～その原理とプロセス～」
講　師：佐藤浩章氏（大阪大学准教授）
会　場：國學院大學渋谷キャンパス
（若木タワー地下１階　02会議室）
11月８日：國學院大學人間開発学会第６回大会　公開シンポジウム
「健康づくりのための身体活動・運動の重要性
―どうすれば人は体を動かすようになるか？―」
会　場：國學院大學横浜たまプラーザキャンパス
主　催：國學院大學人間開発学会･國學院大學人間開発学部
共　催：本機構
○学生向けワークショップ・オリエンテーション
12月４日：LLC YOKOHAMA OFFICE開設記念ワークショップ開催
12月５・８・９日：LLC YOKOHAMA OFFICEオリエンテーション開催

研修会・打ち合わせ会等

7月31日：前期SA（スチューデント・アシスタント）最終報告会
9月27日：後期SA研修
10月４日：後期ノートテイク研修会
10月18日：ホームカミングデーSA同窓会（於國學院大學渋谷キャンパス）
11月15日：後期SA中間報告会
12月６日：パソコンノートテイク研修会

FD活動、教育支援

12月13日：第３回初任者研修兼第２回FDワークショップ開催

出張等

8月18～19日：平成26年度障害学生支援実務者育成研修会基礎プログラム参加（関口書記、於一橋講堂）
8月20～22日：日本リメディアル教育学会第10回全国大会参加（鈴木助教、於東京電機大学千住キャンパス）
8月25～27日：日本私立大学連盟「平成26年度マネジメントサイクル（PDCAサイクル）修得研修」参加（小濱助教、於私学会館アルカディア市ヶ谷）
8月29日：平成26年度障害学生支援ワークショッププログラム参加（高橋主任、於国立オリンピック記念青少年総合センター）
9月１日～４日：東北再生「私大ネット36」南三陸サマープログラム2014 Act.3引率（加藤機構長）
9月18日～19日：平成26年度障害学生支援実務者育成研修会応用プログラム１回目参加（鈴木助教、於日本学生支援機構東京国際交流館プラザ平成）
11月８日：東北再生「私大ネット36」第２回シンポジウム「これから大学が地域と共にできることを考える」参加、加藤機構長登壇（東海林学修支援センター長・鈴木助教・朝比奈課長補佐・高橋主任参加、於國學院大學渋谷キャンパス）
12月１日：平成26年度障害学生支援実務者育成研修会応用プログラム２回目参加（鈴木助教、於一橋講堂）
12月12日：大学監査協会「教学監査ワークショップ」参加（朝比奈課長補佐、上智大学）

刊行物

12月22日：教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース』第11号
2月：『平成25（2013）年度授業評価アンケート分析報告書』

★新任教員紹介

松岡弥生子（教育開発推進機構准教授）

教育開発推進機構では、ランゲージ・ラーニング・センター（LLC）を担当しています。Autonomous Learnerという言葉をご存知でしょうか？　自ら目的や学修方法を設定して学ぶ“自立した学修者”という意味です。誰しも一生、先生や学校と共に生きていく事はできないので、自立無くして語学のような長く時間のかかる勉強をし続けることはできません。LLCは、自主的な学修のお手伝いをし、グローバルな人材育成に貢献します。英語のトライとエラーを繰り返せる場所LLCへ、ぜひ一度、足を運んで下さい。因みに、趣味は、水泳と絵画です。

長田　恵理（人間開発学部初等教育学科専任講師）

私の学部時代の専攻はイタリア語です。しかし卒業以来ほとんど使う機会がなく、現在に至ります。最近になって、インターネットを通じてイタリア語に触れることが可能だと思い至りました。例えばfacebookの言語をイタリア語にしてみたら、忘れていた語彙を思い出したり、そう言うんだ！　という気付きが起こったり。些細なことですが、学ぶ楽しさを味わっています。皆さんに語学を学ぶ楽しさをお伝えし、学修のお手伝いをしたいと思います。

★SA（スチューデント・アシスタント）募集

教育開発推進機構では、大人数授業における教育効果向上を目指して、SA（スチューデント・アシスタント）制度を実施しています。教材の印刷や配布、出席カードの整理等を通して先生方の授業運営の支援にあたります。

［応募資格］ ２年生～４年生で、大学の教育活動支援に関心・意欲のある方

★ノートテイカー募集

教育開発推進機構では、聴覚障害のある学生のため、講義内容の要約筆記（ノートテイク）をしてくれる意欲ある学生を募集しています。研修を行いますので、初心者でも大丈夫です。

［応募資格］ ２年生～４年生で、障害学生の支援業務に関心・意欲のある方

※勤務形態・応募方法・採用期間・給与等の詳細は、募集時に教育開発推進機構ウェブサイト等で告知します。

啐啄同時（そったくどうじ）
― 編集後記 ―

第11号となる今回は「大学授業最前線」のコーナーを巻頭に置き、本学の経済学部において行われている、グループワークを中心とした授業の取り組みについて特集しました。今日高等教育の分野で注目されている「アクティブ・ラーニング」形式の授業実践ですが、記事ではその具体的な内容を紹介するとともに、担当教員と学生からのコメントも併載しています。授業実践そのものの面白さもさることながら、取り組みを通じて得られた学生の意識の変化や、グループワークという手法のメリット・デメリットへの気づきなど、多くの示唆的な記述がなされています。その他にも、現役SAとOBとの交流・意見交換が行われた同窓会、新設されたボランティア・ステーションの紹介、装いも新たに刊行された『教員力ステップアップ講座』など、全学・学部・機構における様々な「さらに一歩」の特集号となった趣です。（小濱）

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第11号　平成26年12月22日発行
発行人 加藤季夫　編集人 中山　郁・小濱　歩・鈴木崇義　発行所 國學院大學教育開発推進機構　〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28